

高梁の文化収蔵品

今月号は、歴史美術館に収蔵されている「板倉勝静像」を紹介します。

問い合わせ 歴史美術館 (☎0180)

板倉勝静(1823~1889)は幕末の備前松山藩主で老中首座。藩政の改革を漢学者山田方谷(1805~1877)の登用によって成功させ、幕末期の幕府政治の中核も担っています。始祖板倉勝重(京都所司代 1545~1624)が総奉行となつて築いた京都二条城で、慶応3(1867)年10月14日、15代将軍徳川慶喜(1837~1913)の大政奉還に立会い、徳川幕府の最後を見届けた老中でもありました。



①板倉勝静像(部分) 平木政次 作
明治15(1882)年 1幅
絹本着色 縦115.0センチ 横49.2センチ

①は明治15年の作で、勝生前の姿(寿像)です。明治以後、板倉家の家扶であつた平木政次(洋画家・1859~1947)の作です。烏帽子に狩衣を身に付け、中啓(扇の一



②板倉勝静像(部分) 平木政次 作
制作年未詳 1幅
絹本着色 縦119.6センチ 横53.0センチ

②は冠に束帯を身に付けた勝静像です。制作年は明らかではありません。束帯の袍(上着)の色が黒であることから、位階が四位以上であることがわかります。老中は通例として四位に属することが多く、この像もそれを示しています。作者は①と同じく平木政次です。①②とも市内八重籬神社に伝えられていました。平木作の同様の束帯姿の勝静像で表装も同じものが、板倉家菩提寺長圓寺(愛知県西尾市)にも奉納されており、平木はそれぞれ板倉家ゆかりの神社、寺院へ奉納したものと見られます。

シリーズ

歴史まちづくりセミナー ⑨

歴史まちづくり計画から「吹屋銅山の歴史②」について紹介します。

問い合わせ 歴史まちづくり課 (☎026257)

(前月号からのつづき)

⑤地元資本の経営者大塚家

泉屋の後、地元資本の経営者大塚理右衛門宗俊が現れます。享保7(1722)年に銅山経営を請け負ってから銅の産出量は増加し、寛保2(1742)年までの7年間は、平均して年間10万斤(約60ト)の銅を生産しました。しかし、再び新たな排水路が必要になり、多額の資金を調達するため京都の銀座と結んで銅山経営を進め、安永2(1773)年の頃には第3のピークを迎えました。大塚家は天文年間(1532~1554)以来、地元で請負人となつていたといわれていますが、この時期、銅山経営者(「銅山師」としての地位を確立し、理右衛門・定次郎父子は大塚家中興の祖となりました。しかし、採算が合わなくなつて京都の銀座

も手を引き、天明元(1781)年11月に閉山します。

銅山衰退に伴い人口も減少していき、備中・美作代官の早川八郎左衛門正紀が銅山を復興すべきと考え、前経営者である大塚家の定次郎・兵十郎父子が請負人となり、寛政3(1791)年から弘化4(1847)年までの57年間経営されました。これが第4のピークとなりました。

⑥ベンガラ生産の始まり

吹屋でのベンガラ生産の始まりは宝永4(1707)年ごろといわれ、吹屋村を訪れた銅山師がその技法を伝え、森屋茂太夫が初めてベンガラ生産を試み、地域産業となり、ベンガラは全国へ送られました。良質の硫化鉄鉱の産出、中間製品の緑礬が製造できるようになったこと、早川代官の産業奨励策によりベ

ヘルシーレシピ 12月



根菜のおろしサラダ

ダイコンおろしは和食の付け合せや薬味としてよく使われます。すりおろすことで独特の辛みが出て、アミラーゼ、プロテアーゼ、リパーゼなどの酵素が含まれているので、揚げ物や肉、魚料理などの消化を助けます。酵素は熱に弱いので、加熱をとまなう調理法には向きませんが、ダイコンは生のまま食べることで効果を発揮します。



今月のレシピ提供は

市栄養改善協議会連合会巨瀬支部
藤森 なをみ さん

1人分の栄養価 エネルギー 97kcal、たんぱく質 1.7g、脂質 5.4g

<材料> (4人分)

レンコン	80g
ニンジン	40g
シメジ	40g
ゴボウ	40g
塩	2g
ごま油	5cc
ダイコン	200g
酒	8cc
しょうゆ	12cc
酢	16cc
マヨネーズ	20g
カイワレ	12g
黒ゴマ	4g

<作り方>

- ①レンコンは薄いいちょう切りにし、水にさらして水気を切っておく。ニンジンもいちょう切りにする。シメジは根を落としほぐす。ゴボウはさがきにし、水にさらして水気を切っておく。
- ②①を耐熱皿に広げ、塩とごま油を振り、ラップをして電子レンジで加熱し、冷ましておく。
- ③ダイコンをすりおろし、軽く水分を切る
- ④ダイコンおろしに②を加え、②をあえる。
- ⑤カイワレは根を落とし、半分に切る。
- ⑥④を器に盛り、カイワレと黒ゴマをのせる。

※このレシピは、行政チャンネル、市ホームページでも紹介します。



本片山ベンガラ工場の絵図(明治期)

ンガラ稼人の株仲間が結成されたことが隆盛の一因となりました。

⑦三菱による銅山経営の近代化

再び吹屋銅山が脚光を浴びるのは、明治6(1873)年三菱の岩崎弥太郎が、請負権を買収して近代的経営を始めてからです。三菱は外人技術者や学校出の新知識を動員して、吹屋銅山の鉱脈、銅鉱の質を調査し、その政治力と資力を傾けて再開発に着手しました。

明治9(1876)年三番通道の開削に着手し、深敷(地中深くになった坑道、鉱床)開発のための排水坑道を造り、自家水力発電所を設け、その電力で揚水ポンプを作動させ、深敷にたまった



吉岡銅山専用道路用トロッコ

水の排水を始めました。これにより、景気の変動を繰り返してきた銅山経営は安定します。特に、洋式溶鉱炉などによる精錬過程の近代化と、吹屋から坂本へ鉱業所本部を移転したことで、吉岡銅山の経営は一新しました。明治20(1887)年ごろから産銅額は飛躍的に増加し、明治41(1908)年にはトロッコによる大量輸送を実現しました。この時期が第5の、そして最後のピークでした。その後、鉱脈の枯渇や第1次世界大戦後の不況、世界大恐慌によって次第に衰え、昭和6(1931)年に閉山します。昭和25(1950)年に「吉岡鉱業所」として再開され細々続けられましたが、昭和47(1972)年に閉山、歴史を閉じました。